

## 追悼

一般社団法人日本在宅救急医学会設立と野中博先生

小豆畑丈夫

私が野中博先生に初めてお会いしたのは、一般社団法人日本在宅救急医学会の前身である日本在宅救急研究会設立のための第一回世話人会の会場でした。2017年4月8日、土曜日の午後、東京御茶ノ水にある東京ガーデンパレスの会議室です。日本在宅救急研究会は、私と医療法人社団いばらき会いばらき診療所の照沼秀也先生が発起人となり、現代表理事の横田裕行先生と相談して立ち上げた研究会でした。立ち上げにあたり、研究会を牽引していただく世話人の選定を私と照沼先生で行いました。私が救急医で、照沼先生は在宅医です。在宅救急という言葉は私たちが造った新しい言葉です。在宅医療と病院（救急）医療をシームレスにつなぐことで、理想的な地域包括ケアを再構築できると考えたことから生まれました。そのコンセプトに基づいて、救急医療と在宅医療の世界から、活躍されている先生方を半々のバランスで選定していきました。そのような過程のなかで、照沼先生が、「原則を度外視して、ぜひとも参加していただきたい先生がいる」と切り出されました。それが、野中博先生でした。照沼先生からは「野中先生は東京都医師会長をされた方です。診療所医師でありながら、20年前から在宅医療の必要性を訴え、東京都医師会を中心に地域医療の確立に力を注いだ先生です。僕が大好きで、尊敬している先生です」と聞かされました。その後、照沼先生が野中先生に研究会への参加をお願いした結果、日本在宅救急研究会への参加をご快諾いただきました。野中先生は、「自分は体調があまりよくないのでどこまでやれるかわかりませんが、地域医療のためならやってみましょう」とおっしゃってくださったと、照沼先生からお聞きしました。そして、研究会発足の初めての会合で、私は野中先生にお会いしたのです。

そのころ、野中先生は大きな病気を克服されたあとで、体調が万全でないことから、東京都医師会としての活動は引退されていました。先生は、病気の影響で声を出すのが大変そうでした。喉をふり絞るようにしてお声を発されていました。できたばかりの小さな研究会に参加していただくことに、私は申し訳なさを感じました。先生のお体のご負担になってしまうのではないかと感じたからです。

そのようななかで第一回世話人会は始まりました。この研究会をどのような会としていくかを決める大切な会議です。会議室の中でテーブルは「コ」の字型に配置されていました。「コ」の字型の真ん中のテーブルの中央に、代表世話人の横田裕行先生（当時、日本救急医学会代表理事、日本医科大学救急医学主任教授）、向かって左に会田薫子先生（東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター 特任教授）、そして向かって右に野中博先生に着席していただきました。この3名は、研究会の中心となる方々です。そして、司会から「先生方、好きなお席にご自由にお座りください」とアナウンスがありました。私は真ん中のテーブルから見て「コ」の字型の右翼に、話しやすいように照沼先生は左翼に着席しました。そのあと、救急・在宅の先生方がそれぞれ4～5人ずつ会議室に現れました。そうすると、指定はしていないのに、救急の先生は私の座る右翼に、在宅の先生は照沼先生の座る左翼に自然と席を取るのです。全員がそろったときには、完全に救急医の右翼、在宅医の左翼に分かれてしまいました。そして、それを繋ぐ真ん中のテーブルに、代表の3人が座るスタイルです（写真1）。

会が始まったとき、これが何を意味しているのか私は気づいていませんでした。しかし、この研究会をどのような会にしていくかの議題の討論が始まったのち、私はこの研究会が宿命的に抱えている、大きな課題に気づいたのです。私と照沼先生はこの研究会発足の趣意を「在宅医と救急医が同じテーブル

について、地域医療構想を話し合うこと」としていました。それを世話人の先生方にご承認いただいて、それでは「我々が構築すべき地域医療とは何か？」を話し合ったときのことです。最初、救急医と在宅医でその意見は全く歩み寄ることができませんでした。この現象を私と照沼先生は全く予測できておらず、困り果てました。救急医は、「救急医療こそが地域医療の要である」と自負して譲りません。在宅医は、「在宅医が地域医療を底辺で支えている」とプライドを持っています。救急医は「何を犠牲にしても命を救うことが医療の正義である」と信じて主張するのに対して、在宅医は「命そのものよりも、いかに人生を豊かにすることが大事である」と譲りません。さらには、以下のような議論もありました。在宅医が長期間自宅で患者を診ていたが急変し、入院治療が必要だと在宅医が判断して病院に治療を依頼すると、必ず在宅医が嫌な思いをするということです。例えば病院医（救急医）から「あなたたち在宅医が診ていて、なぜこんなに悪くなるまで放っておいたのか？あなた方は本当に医者なのか？」というようなことを言われる場合がある。病院医（救急医）からのこのような対応は在宅医としては誠に心外である。「在宅医はできるだけ患者さんが希望する自宅での治療を続けてきているのだ。放っておいたのではなく、よく、ここまで自宅で頑張ったと考えてほしい」と在宅医は主張します。それに対して、救急医は笑うだけでした。このような様相で、私は「この会はもともと成立しないのかもしれない」と感じてしまいました。なんとか打開しようと頭を必死に捻りましたが言葉が出ません。救いを求めて照沼先生の顔を見ましたが、先生も困惑しているようでした。そのときに、野中先生が声をあげられたのです。「あなた方は、誰のために医療をやっているのでしょうか？救急医は救急医療のためですか？在宅医は在宅医療のためですか？もう一度、考えてみてください。皆さんは患者さんのために一所懸命に医療をされているのですよね。そこに立ち返って、議論をしませんか」。この言葉で会場の雰囲気は変わりました。目の前に広がっている濃い霧のために行く先を見失っていた在宅医と救急医がそこにいました。そこへ、力強い風が吹いてきて目の前の濃霧がサッと流れ急に視界が広がった感覚を皆で共有しました。初めて、みんなが共通の目標を得た瞬間であったと思います。「私たちが目指す医療、それ自身がまだわからない。それを考えるところから始めませんか？」それが最終的に第一回世話人会で至った我々世話人の結論になったのです。それを受けて、研究会発足の趣意書はその場で以下のように書き直されました。

**日本在宅救急研究会は、在宅患者が急性増悪したときに生じる問題を在宅医療に関わるスタッフと救急医療に関わるスタッフとが同じテーブルについて検討することで、在宅患者にとって“本当の良き医療”の構築を目的とする。**

この趣意書を持ちえたことは、我々学会員の誇りです。私はいつもこの言葉を自分に問いかけます。「お前の行動は、本当に患者さんのためを考えているか？自分や病院側の都合で医療を捻じ曲げているか？」そのたびに、あ那时的野中先生の優しくもまがいの物を決して見逃さない厳しい顔が目に見えて浮かんできます。野中先生のお言葉は私の心に確かな重量感をもって残り続けています。しかも、それは、私だけではなかったことがのちにわかりました。2017年7月22日、照沼秀也先生を会長として記念すべき第一回日本在宅救急研究会学術集会在開催されました。その際に、照沼先生が設定した特別講演のタイトルが、「高齢者にとって“本当の良き医療”とはなにか？患者の目線で考える」だったのです。講演を会田薫子先生にお願いし、司会はもちろん野中博先生でした（写真2）。講演は、会田先生の死生学の専門知識をもとに実際の医療を考える画期的なものでした。そして何よりも、野中先生が壇上で始終嬉しそうな笑顔でいらっしやっったことが印象に残っています。そして、これが学術集会で先生

の顔を拝する最後の機会になってしまったのです。

私がおのちに野中博先生にお会いできたのは、二度ほどありました。一度目は2018年9月の第2回学術集会を開催する前に照沼先生と野中先生の医院を訪れて、学術集会の概要の説明をさせていただき、先生のご参加をお願いしたときでした。そのときの野中先生の言葉を今でも覚えています。「小豆畑先生、照沼先生、救急医療は医療の原点です。在宅医療は地域医療の縁の下の力持ちです。どちらが欠けても、患者さんに幸せはありません。力を合わせて頑張ってくださいね」これが、私が頂いた野中先生の最後の言葉になってしまいました。9月の学術集会には野中先生は体調不良で参加いただけませんでした。二度目は同年10月に先生が旭日中綬章を受賞されたときのパーティーにお誘いいただき、野中先生がご家族と一緒に幸せそうにされている姿を遠くから拝見させていただいたときです（写真3）。このときはお元気そうでしたので、私はそっと胸を撫でおろしました。しかし、2019年7月29日、野中博先生はご逝去されました。

2019年12月1日、帝国ホテルで行われた“野中博先生のお別れの会”の前に奥様にお時間をいただき、日本在宅救急医学会代表理事の横田裕行先生から感謝状を進呈させていただきました（写真4）。

私たちは野中博先生という、偉大な先達を失ってしまいました。しかし、野中先生が日本在宅救急医学会に残された業績は、学会自体がなくなる限り失われることはありません。当学会は、野中先生が遺してくださった「患者さんのための“本当の良き医療”を目指せ」というポリシーを得たことで初めて確立されました。そして、その言葉は今や私たち学会員全員の医療者としての心の道標として昇華され、焼き付いています。野中博先生は、日本在宅救急医学会とともにあるのみでなく、我々医療者の心の中で今でも生きています。私は野中博先生の言葉を胸に、先生によって立ち上がることができた日本在宅救急医学会の発展のためにこれからも力を尽くしていきたいと思っています。野中博先生、本当にありがとうございました。これからも、我々をお支えください。

追記：この文章は野中博先生がご逝去されてから一年以上の時間を経て書きあげました。その理由は、野中博先生を失った悲嘆と心細さのなかから私自身が立ち上がり、野中先生が日本在宅救急医学会に遺していただいたものを文章にできるようになるまでに時間が必要だったからです。2020年末に発刊される日本在宅救急医学会誌（初めての正式な医学会誌）に間に合わせるために、自分自身を奮い立たせて書きました。私の至らなさのために、こんなにも遅くなってしまったことを、野中博先生の奥様やご家族の方々にお詫び申し上げます。

2020年10月15日

日本在宅救急医学会発起人・理事

小豆畑丈夫

写真1 2017年4月8日(土)日本在宅救急研究会第1回世話人会:研究会発足の会(東京ガーデンパレス)



写真2 2017年7月22日(土)日本在宅救急研究会第1回学術集会(発明会館地下ホール)  
特別講演「高齢者にとって“本当の良き医療”とはなにか? 患者の目線で考える」司会:野中博先生



写真3 2018年10月21日(土) 旭日中綬賞受賞のお祝いの会(帝国ホテル)。野中博先生と奥様、お孫さん達



写真4 2019年12月1日(土) 野中博先生お別れの会(帝国ホテル)。日本在宅救急医学会代表理事横田裕行先生より、野中先生の奥様に感謝状を進呈いたしました。

